

次世代型海藻養殖による豊かな伊勢湾再生事業－Ⅱ

黒ノリ養殖支援

岩出将英・舘 洋

目的

本県の黒ノリ養殖業では、生産者に対して養殖環境についての情報提供や病害等の対策を指導するなど、きめ細かな対応が求められている。

本事業では、漁期中にノリ漁場栄養塩調査およびプランクトン調査を実施し、その結果を迅速に生産者へ発信するとともに、その後の対応策等についての情報を提供することで黒ノリ養殖生産の安定化を図ることを目的とする。

方法

1 今漁期の気象の特徴について

気温、降水量は、津地方気象台が発表した津市のデータを用いた。

2 今漁期の海況の特徴について

水温は鈴鹿市白子港(午前10時)の定時観測データ、栄養塩および植物プランクトン発存量は三重県ノリ漁場栄養塩調査のデータを用いた。

3 共販結果について

三重県漁業協同組合連合会発表の令和4年度共販結果データを用いた。

4 ノリ芽検診・病害診断等の養殖指導

漁期中において生産者から送付、持ち込みされたノリ網や葉状体サンプルについて病害診断等の養殖管理にかかる指導支援を実施した。

結果及び考察

1 今漁期の気象の特徴について

図1に今漁期(令和4年10月から翌年3月)と平年(平成3年から令和2年の過去30年間)の気象(気温・降水量)の推移を示した。気温は、11月中下旬、1月中旬および2月上中旬に平年より高めからかなり高めで推移した。それ以外の期間では概ね平年より低めで推移した。降水量は、11月下旬に平年よりかなり多かったが、それ以外の期間では平年より少なかった。特に12月から1月上旬にかけては顕著な少雨であった。

2 今漁期の海況の特徴について

図2に鈴鹿市白子地先の水温及び漁場の平均DIN(桑名漁場を除く)と珪藻プランクトン発生最大密度の推移を示した。

水温は、12月中旬にかけて平年より概ね高めで推移した。12月下旬から1月上旬にかけて平年より低めとなったが、1月中下旬にかなり高めとなった後、平年並みからやや高めで推移した。

DINは、10月下旬にかけてスケルトネマ属を優占種とする珪藻プランクトンが最高密度10,600cells/mLで発生したため、60 μ g/L程度まで急激に減少したものの、1月上旬にかけて珪藻プランクトンの発生密度が低位で推移したため、70 μ g/L程度で推移した。2月から珪藻プランクトン(キートセロス属およびニッチア属が優占種)の増殖が見られ、40 μ g/L程度まで低下した。

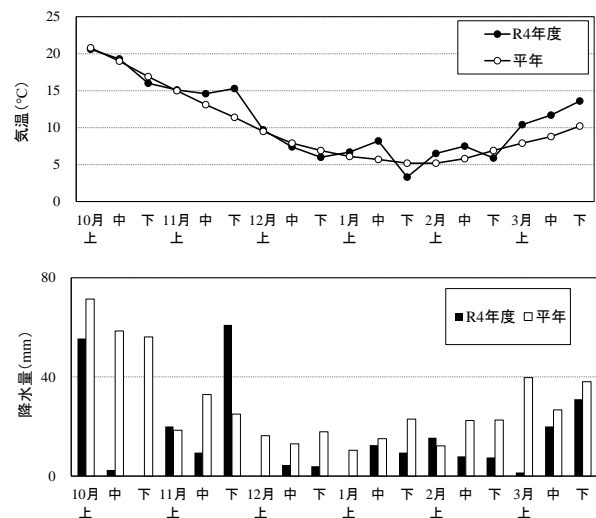


図1. 今漁期の気象動向(上:気温, 下:降水量)

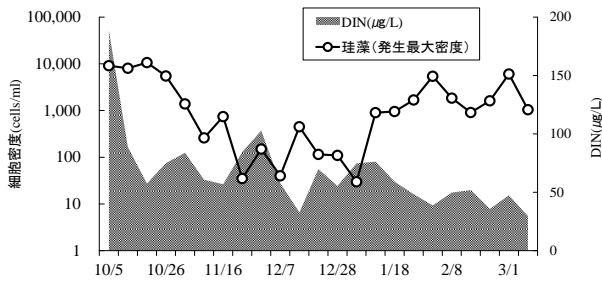
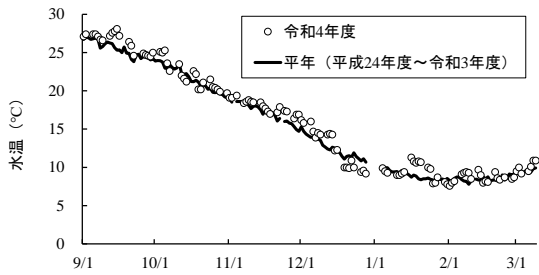


図 2. 今漁期の海況（上：水温の推移，下：DIN 量と珪藻プランクトン発生量の推移）

3 共販結果について

令和 4 年度漁期の生産枚数は 1 億 2,590 万枚（前年度比 143%）、生産金額は 22 億 5,780 万円（前年度比 240%）であった。平均単価（枚）は、17.9 円（前年度比 168%）であった。

共販汐回別の生産枚数と平均単価について図 3 に示した。単価は、主要生産県の不作により 5 回汐（令和 5 年 1 月 13 日）から 6 回汐（同 2 月 10 日）にかけて高騰した。令和 4 年度漁期は生産の最盛期にあたる 1 月中旬から 2 月下旬にかけて大きな色落ち被害の発生は見られず、全県的に好調な生産が継続された。

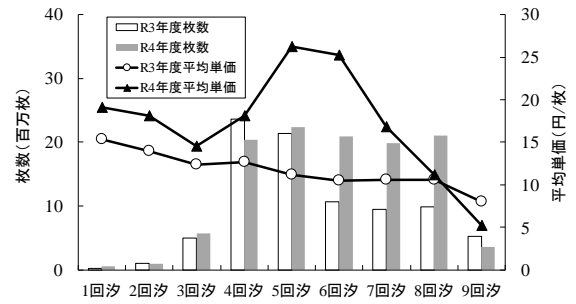


図 3. 汐回別生産枚数と単価の推移

4 ノリ芽検診・病害診断等の養殖指導

漁期中に県内漁場の栄養塩動向調査およびプランクトン発生調査を合計 24 回実施し、生産者および関係部署あて情報提供を行った。また、生産者の要望によりノリ芽検診および病害診断を随時実施し養殖管理にかかる指導支援を実施した。ノリ病害については、漁期中盤から終盤にかけて、一部の漁場で付着珪藻に起因する品質低下（C 等級）がみられた。また、年内生産期を中心に食害と思われる葉体短縮被害により生産に影響が出た生産地区も見られた。